

---

洋 書 紹 介

*Children's Games in Street  
and Playground*

by Iona and Peter Opie

Printed 1969

Oxford, at the Clarendon Press



江 波 諄 子

---

この書物の中では、イギリス本土やウェルズ、スコットランド地方の子どもの遊び―屋外で行なわれ、特に遊具を使わない遊び―が大変詳しく、ていねいに調べられて、分類されています。遊びと学習との間に論争の多い昨今、日本の子どもの遊びも考えながら、昔ながらの子どもの遊びをふり返ってながめてみるのも心落ち着くものかと思えます。

著者はイギリス王国の各都市に住む、六歳から十二歳までの一万人以上の子どもを対象に、彼らの遊びを観察したり、聞いたり、また他の国々の研究者からも補ってもらい、これまでの文献も参考に、三百七十一ページという膨大な本にまとめました。

細かい遊びの紹介はこの欄ではできませんので、研究の結果、彼らが気がついたことについて、いくつか箇条書きにあげてみましょう。

① 本当のゲームというものは、精神的に自由なもので、何の心配もいらぬ。たとえ、ある種の形があるにしても、結局は遊ぶ子ども自身が即興で行なうものである。それに比べて、形のきちんとしたゲームでは、責任感や喜びや恥ずかしさが伴う。

② 遊び (Play) には何の拘束もないが、ゲームには規則がある。遊びはファンタジーの要素が入ってくるが、ゲームは

内容がより大切である。子どものゲームは規則も最小限で、しかも規則は弾力的である。少くらしいの欠員は大丈夫で、お互いに技能を競い合うということは少ない。ゲームを始める前の儀礼的なことは大変重要で、何回もくり返され、特に終りがあるというわけではない。競争するというより、もっと儀式的なものようである。

③ 子どもはゲームをくり返しすることによって、それに慣れ、その中から朋友感を得る。ちようど、恥ずかしがりやの人が形式ばったことから自分をあらわしてゆくように、子どもはゲームの方法に慣れるとともに、自分のいごこちもよくなり、他のことも仲よしになっていく。ゲームの中では、子どもは別に自分のことを説明しなくても、ゲームに夢中になることができ、仲間の間で人気者であろうとなかろうとよいプレイヤーになれる。ふだん恐れている子どもとも、ゲームの中ではよきパートナーになれる。ふだんの生活では経験できなかったり、やっても誰も頼りにしてもらえない子どもでも、ゲームではことに命令したり、困ったり、盗塁したり、つかまえた者にキスしたりすることが本人の決定にまかされる。

④ 子どもがゲームをして遊ぶ時、彼はあるコントロールの下で場面をつくっている。そしてそれがどんな結果になるか彼にはわからない。ゲームには、いつも冒険的な興奮と不安定が

あり、年齢が小さくても全体はわかり、また自分の役割も理解できる。そのことによって子どもは自分の世界をひろげ、自分も何かしているのだと感じ、ふだんの経験では味わえない感激を味わう。

⑤ 現代の子どもは昔よりもずっと、おとなっぽくなり、以前の子どもよりも、二、三年早く同じ遊びをしている。

⑥ 子ども遊びはその他の社会の変化と比べるとそれほど変化していない。ことにゲーム中のある種の練習など、ゲームそのものよりも変わっていない。

⑦ ゲームはしだいにその形や規則を変え、また人気も変わっていく。ひとつのゲームでも、規則や形の変化が加わったりする。スポーツはそれがもっと精巧化されたもので、より高度な技術が必要になってくる。そして一ゲーム終えるのにもずっと時間がかかる。

一見なくなりそうなゲームも、そのゲーム全部はしなくなっても、実際の内容は残っている。ゲームを始める前のちよつとした時間や、おまじないのようなことはなくなっても、ゲームそのものの内容は、今人気のあるゲームの中に入りこんだりしている。だから、なくなりそうな遊びも決して完全に消えさせているのではない。

⑧ 子どもはいつも街路とか公共の場所のような、不適当な

場所遊ぶ。遊びには、そういった意味で何かに対する反抗的な面があるのだろうか？

⑨ 子どもの遊びは、時々残酷な面がある。子どもがたくさん集まる遊びは、わりあい、攻撃的なものが多いと社会学者はいつている。ということは、いろいろな部族が集まるとお互いにけんかをするという人間の習性にも似ている。

⑩ 子どもはごちゃごちゃした場所や空地などが、隠れたり、探検できるので好きである。

⑪ 子どもは遊びを発明するというより、模倣していく。昔あった遊びが今ないというのは、人為的になくなったのではなく、子どもがまちがえておぼえたり、聞いて変わってしまったのである。

以上本文からの抜萃ですが、このあと、著者はゲームを十二種類に分け、それぞれに属する子どもの遊びをこまかく紹介しています。文化的な背景がないと十分理解できませんが、その中でわが国の子どもの遊びとの共通の面をみつけるのも楽しいものです。

---

## News Week

22th, May

1972

雑誌ニューズウィークの五月二十二日号（一九七二年）の教育欄は、「学習するのに幼すぎることはない」といった題で、米全国各地での幼児教育運動の盛んな動きをとりあげています。その中から困いこみの記事をご紹介します。これは「親は何をしてやれるか」と題して、数名の心理学者や教育者に一言ずつ尋ねたものです。以下はその中からの抜萃です。

母親がすることは何でしょうか？ 急速におこった幼児教育の波の中で、多くの母親たちは不安にただうろたえるばかりです。ジョニーは、二歳のお誕生日までにアルファベットを知らなくてはならないのでしょうか。スージーは小さな頭の中に、たくさんの語彙を詰めこまなくてはならないのでしょうか。専門家は口をそろえて、早期学習は大切だ、その多くは、両親にゆだねられていて、出発が悪いと子どもの人生をだいなしにして